

(公社) 島根県水産振興協会への種苗生産等の技術移転

佐々木 正・近藤徹郎・常盤 茂

1. はじめに

平成22年度からマダイ・ヒラメ・イワガキの種苗生産業務を公益社団法人島根県水産振興協会（以下「協会」と称す）に委託することとなった。このため、当センターでは種苗生産および施設管理の技術移転を目的に平成22年度から種苗生産を担当する協会職員への技術指導を開始した。今年度も引き続いて協会職員（計6名）への技術指導を実施する。

2. 技術移転のスケジュールおよび方法

スケジュール 放流用種苗のマダイ（生産期：5～7月）・ヒラメ（生産期：1～4月）および養殖用種苗のイワガキ（生産期：6～12月）の生産技術についてはそれぞれの生産期毎に集中的に技術指導を実施する。その他、生物餌料（植物プランクトン、ワムシ等）、親魚（貝）および施設の日常的な管理業務については随時指導を行う。

方法 種苗生産技術については、水産技術センター職員が最新の種苗生産マニュアルを基に技術指導を行う。生産期間中は生産業務を水産技術センター職員と協会職員が共同で実施することとし、生産期間中の空き時間や種苗生産の閑散期には随時勉強会を開催して種苗生産に関する知識の習得を図る。また、(独法)水産総合研究センターにおける餌料培養研修や(社)日本水産資源保護協会における養殖衛生管理技術者養成研修等の受講により専門的な知識の習得による技術向上を図る。さらに、県内外で開催される栽培漁業に関連する会議、学習会等への積極的な参加により幅広い情報の収集を行う。

施設管理については、協会職員が各自で担当する種苗生産の関連施設および機器の構造・機

能への理解を深め、施設管理技術の習得を図ることとし、施設管理主担当（1名）については、個別指導や業者等からの情報収集によりさらに専門的な知識の習得を図る。

3. 種苗生産結果

マダイ種苗170万尾（平均全長46～50mm）を生産し、7月に要望数量の80万尾を出荷した。

ヒラメ種苗84万尾（平均全長46～78mm）を生産し、4月に要望数量の66万尾を出荷した。

イワガキ種苗102,200枚（1枚当たり稚貝10個体以上付着）を9月～翌1月に出荷した。

4. 技術移転の進捗状況

種苗生産技術については、職員により習熟度にばらつきがあるものの昨年度に比べて協会職員の主体的な取り組みが増えてきたと考えられた。施設管理については、施設管理主担当の協会職員が中心となって機器などのトラブル発生にも適切に対応でき、特に業務が滞ることが無かった。

協会職員の技術習得状況は、全般的に順調に推移しており、今後も引き続いて研修や経験を積み重ねることで生産技術を確実なものにできると考えられた。

5. 来年度計画

技術移転の指導を開始してから4年目が経過し、基本的な種苗生産技術は習得済みであり、次年度は、さらに協会職員の主体的な取り組みを進めるとともに技術習得の不十分な箇所については指導を強化し、より確実な技術移転を図ることとする。